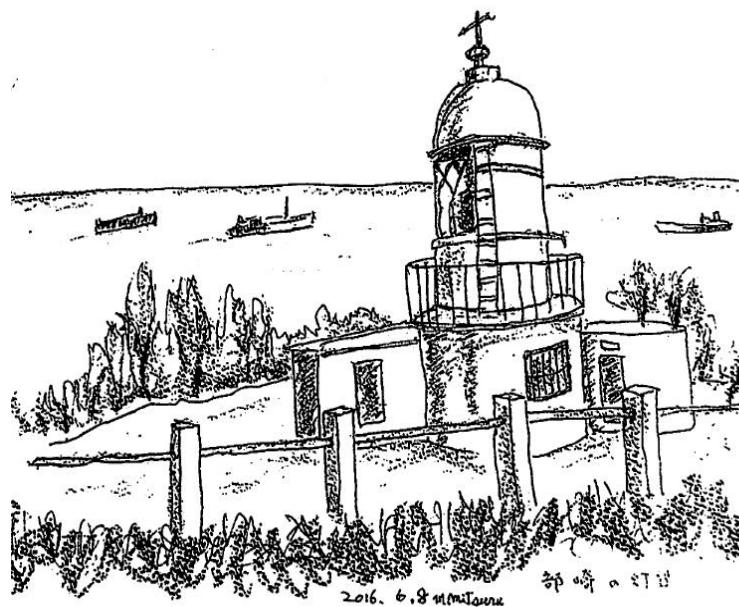


週報2021年2月28日



2021年教会標語聖句

見よ。わたしは新しい事をする。
今、もうそれが起ころうとしている。

イザヤ書43章19節

シオン教会信仰指標：“イエス様と共に歩む”

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団

北九州シオン教会

牧師：山崎銀次郎

<http://jesus.holy.jp/>

〒800-0038 北九州市門司区大里原町 6-10

TEL 093-381-4395(FAX…4396)

牧師携帯 090-6737-5276



礼拝順序 2021年2月28日

司会・奏楽・メッセージ 山崎銀次郎 牧師

開会の祈り

使徒信条・標語聖句唱和

賛美「君は愛されるため生まれた」

今までのめぐみに感謝し、新たな献身を祈りましょう！

お祈り

聖書朗読 ヨナ書 4章 9~11 節

説教題「神の慈しみの中で」

応答の祈り

終祷「祝福の祈り」

交わりの三省

- *互いに愛し合っていますか
- *互いに赦し合っていますか
- *互いに祈りあってますか

説教要約

ヨナ書4章9-11

「神の慈しみの中で」

① 導入(お前は怒るが、それは正しいことか?)

時折、私達は相手の些細な言動や行為にイライラしてしまう時があります。職場や学校、家や教会等、共同生活を続けていく内に相手の欠点が目についてしまうからです。しかし私達は相手が自分の些細な事で腹を立てている事に気が付かなかったりします。そして内心「そんな事(相手が腹を立ててるなんて)無い!」と思ってしまいます。聖書は「まず自分の目から丸太を取り除け」と言っています。(マタイ7章1-5新共同訳)そしてこの導入の「お前は怒るが、それは正しいことか?」はヨナ書4章4節(新共同訳)主のヨナに対する問い合わせです。そして今日、私達の問い合わせでもあります。

② 本論(神は“惜しまない”方)

ヨナ書と聞いて、皆さんが真っ先に思い浮かべる場面は“ヨナが大魚に飲みこまれる”所ではないでしょうか?しかし、ヨナ書で最も重要な場面は4章の神がヨナの怒りを諭す所です。(厳密にはヨナ書全体で神はヨナを諭している)。ここでヨナは非常に怒っているのですが、この彼の怒りの原因と矛先が重要なポイントなのです。その怒りの原因とは、神がニネベの人々に慈しみを施したからです。つまり、今まで神を畏れ、信じる事のなかったニネベの人々がたった一回悔い改めただけで、今までおかした全ての過ちが赦された事に腹を立てたのです。これは彼が預言者として神の言葉(=神の慈しみ)をニネベの人々に向けたくなかった事を意味しています。だから最初、彼はニネベに向かうことを拒み、反対方向のタルシシュへ向かったのです。(ヨナ1:3・4:2)

この文脈が見えてくると、ヨナが(神が備えた)大魚に飲まれる理由も見えてきます。神が願っている事は“神が遣わした人を通して、神の慈しみを全ての国民に伝える事です。実際、この書簡でのヨナは色々なことを見失っています。自分が神の恵みの中で召された事。“背き”が

赦された事。憐れみによって又、(奉仕に)選んでもらえた事。ヨナの人生を通じて船員達が(2章参照)神を畏れたこと。そしてニネベの人達が徹底的に悔い改めたことです。神の慈しみは限り無く、いつの時代も神に向き直る者を求めておられる。これがヨナ書のメッセージです。興味深いことに選民である、ヘブル人のヨナだけが神の惜しまない慈しみに、向き合いきれていません。彼は怒ったままです。最後の最後まで神が慈しみを施し、“とうごまの木”を備えていても、、、です。

ヨナの心情は私達の心を鏡のように映し出しています。私達は時折、主の御顔を避けて、神の御心を求めなくなってしまいます。神様の慈しみがわからなくなり、自分を誇り、他者を蔑む事があります。そうなると心が満たされないので、更に自らを誇り、自分より恵まれている(ように見える)人を妬んでしまいます。このように怒りは“慈しみ”を見失います。もう一度、ヨナ書が私達に教えていることは神の慈しみは限りなく全ての人に施されているという事です。私達が神に選ばれたのも、いつも試練から脱出する道が備えられているのも、神の慈しみが向かっているからです。すると、本来の目をもって神が隣人に慈しみを施していることが分かるようになります。聖書がヨナの態度を通じて読み手に投げかけている事は「あなたは神の心を隣人に向けていますか?」です。神の慈しみによって人を慈しむ者へ変えて頂きましょう。

① 結論(慈しみを惜しみなく)

放蕩息子の話で弟が“家出”から帰ってきて、父が盛大な祝宴を催した時、兄は怒って家の中に入りませんでした。「あんな、わがまま放題の弟にそんな事をしてやる必要はない!」と判断したからです。しかしこれは父の御顔を避ける事です。つまり本来、弟に向けるべき慈しみを向けなかったことを意味します。

私もその隣にいる隣人も同じ尊い人間です。同じ神の憐れみを受けた仲間であり家族です。私達は偉人や聖人になる必要はありません。ありのままを神に申し開きして、神からの慈しみを頂戴すれば良いのです。そしてその慈しみを人に向ければ良いのです。心に抱いた、些細な親切から始めてみましょう。それが“和解”的な始まりです。共に主を見上げ前進して参りましょう。